

百済王と桓武天皇

枚方百済フェスティバルも第4回を迎え、催し物も充実してまいりました。このフェスティバルを主催します「百済の会」は、ここ国指定特別史跡である「百済寺跡」を、枚方市民の皆様はじめ多くの皆様に広く顕彰すべく活躍しております。日本中に61しかない、そして大阪府にはたった2つしかない国指定の特別史跡の一つが枚方市にあるのです。この百済寺跡であります。このことを枚方市在住の皆さんもあまりご存じない。百済寺跡のことをもっと知って頂きたいというのが私たちの願いであり、これからのお話しさせて頂く趣旨であります。

「百済寺跡」を考えますとき、これに関わりのある百済王（クダラノコニキシ）と桓武天皇のことをまず最初に知って頂きたいと思います。百済寺跡の隣には百済王神社があって、百済王って何なのと思われていた方も多いでしょうし、「桓武天皇行宮跡」などと刻んだ石碑が神社の鳥居の傍にあたりするものですから、桓武天皇は何か関係があると思われる方もいらっしゃるかも知れません。しかしその前に、そもそも「百済（クダラ）」そのものが分からんとおっしゃる方もおられると思いますので、その辺のところからお話しを始めたと思います。

1. 百済国

(1) 百済という国

朝鮮半島の4世紀の前半から7世紀の終りに掛けて三国時代と言われる時代がありました。高句麗、百済、新羅の3つの国が鼎立して勢力を争った時代です。それ以前には半島北半分が高句麗と中国唐の属領地である楽浪郡、帯方郡などがあり、南半分に、馬韓、弁韓、辰韓という韓族による3つの部族連合体がありました。現代の国家のような中央集権国家とは違って、族長たちによる地域連合体です。半島の南西部が馬韓で後に百済になる地域、真ん中あたりが弁韓とか弁辰とか言いますが後に伽耶・加羅と言われるようになる地域で、そして東の部分が後に新羅となる辰韓です。

この馬韓の中の有力なのが「伯済（ハクサイ）」で漢江の南の地域を支配しておりました。この伯済に高句麗東明王の三男温祚王が侵入して古代国家を建設しました。従って温祚王は百済の始祖と言われているのですが、紀元前18年から紀元後28年まで王位にありました。西暦紀元の前後にまたがって王だったわけです。

その伯済国が314年に高句麗と一緒に唐の帯方郡を滅ぼしますと、近隣諸国を併合して強大化し百済国を建ち上げました。そして近肖古王が王位についた340年の頃が百済建国の時とされているのです。その百済は660年に新羅によって滅ぼされましたが、その復興運動が起こって日本から援軍を出しますが、663年には大敗を喫して百済は完全に滅亡してしまいます。後でお話しすることになりますが、これが百済王の話の発端になります。

そして新羅は5年後の668年には高句麗をも滅ぼし、更に唐を半島から追い出して677年に半島全土を統一します。こうして三国時代が終わります。

(2) 百済が何故クダラか

さて、その百済がわが国において何故クダラと呼ばれているのでしょうか。百済のことをハングルではペクチュと言いますが、それを何故日本ではクダラと呼ぶのでしょうか。

まず百または伯という字についてですが、ヒヤとかハとかは弱音（無声音）であるためクが主たる音になります。例えば万葉集に「うつせみの 人にしあれば 明日よりは 二上山を 弟世（イロセ）とわが思う」という有名な歌がありますが、これは持統天皇によって謀反の嫌疑を掛けられて自刃した大津皇子の姉オオク皇女が大津皇子を偲んで詠んだものです。このオオクは大伯と書かれていま

す。伯はクと読まれています。

済は普通ナリと読みます。ナリはナラから変化したもので、ナラはハングルでは国のことです。また大きな都会とか湊などもナラです。大阪に東成、西成がありますが、これは昔の大坂長柄（上町台地）の東の湊と西の湊ということです。ではナラが何故ダラなのか。これはダラが漢音、ナラが呉音という違いでして、男という字はダンともナンとも読まれ、男女はダンジョともナンニョとも読まれます。同じようにナラはダラに通じるわけです。滋賀県の湖東三山の一つに百済寺があり、これは文字通りヒャクサイジと呼んでいます、以上のようにヒャクサイをクダラと読むことに決して無理はありません。

百済の都があったところに熊津というのがあります。現在の忠清南道の公州です。ハングルではウンジンと言いますが、熊はクマ、クムなどと発音され、津は先程お話したようにナラと読めますから、クムナラ→クナラ→クダラと変化して熊津をクダラと呼び、そして国全体もクダラと呼ぶようになったという説もあります。これも一理あるように思います。

（付）枚方について

今日は枚方/百済フェスティバルですので、枚方についても少し述べておきましょう。

古事記の神武天皇東征の記事のなかに、天皇軍は「青雲の白肩の津」に上陸したとあります。この白肩は枚方だということで戦前戦中には枚方の皆さんの意気が大いに盛り上がりました。枚方小学校の子どもたちの作文集のタイトルに「青雲」と付けられたことがありました。青雲はヒラカタの枕詞であるというわけです。

では白肩とは何かというと、それは白瀉であるという説があります。天野川の下流が交野山地から流されてきた白砂で瀉を形成していた、それでそこが白瀉と呼ばれるようになったというのです。いや白は新羅だという説もあります。日本ではシラギと呼びますが元々はシルラ、シラです。新羅からの渡来人が多く住んでいたところ（瀉）というのです。

枚方市編纂の「郷土枚方の歴史」には、アイヌ語で Pira は「崖」、Kata は「上」で、ピラカタ即ちヒラカタはアイヌ語の「崖の上」であると紹介されています。大阪方面から枚方に近づきますと、枚方は確かに崖の上という感じがしますね。勿論これは昔の狭い意味（範囲）の枚方ですが。シラカタにしてもピラカタにしても容易にヒラカタに転化します。質屋を関東ではシチャと発音しますが関西ではヒチャです。

文献的にヒラカタが最初に出るのは日本書紀第17巻の継体天皇紀です。継体天皇は507年に枚方の樟葉の宮で即位された天皇で、枚方市民にとって馴染み深い天皇ですが、対半島政策にも力を注がれました。新羅と伽耶(任那)の間の問題解決のために近江臣毛野を遣わすのですが成果が見られず、呼び戻された毛野は帰国の途上で死没します。その亡骸を迎えに来た妻の詠んだ歌が日本書紀にあります。次のような歌です。

「ひらかたゆ 笛吹き上る 近江のや 毛野の稚子い 笛吹き上る」

ヒラカタは「比羅拵駄」と難しい字が当てられています。因みにこの歌には「ゆ」「や」「い」という3つの古語が使われていて、その意味からも有名な歌であります。市役所の横の公園の一角にこの歌を刻んだ石碑が立てられていますから、一度確認して頂くとよろしいと思います。

2. 百済王

（1）百済国の滅亡

漢江の南の漢城を都として繁栄していた百済でしたが、高句麗の圧力を受けて475年には南のほうの白村江（白馬江、錦江）のほとり熊津に都を移します。クダラの読み方について説明した熊津です。更に538年にはその白馬江の下流にある泗比(シビ)、現在の扶余(フヨ)ですが、ここにま

た都を移すのです。熊津よりも河口に近くて倭国（日本）との関係を保ちやすく、対立が強まって新羅に対する戦略上の利点があったようです。

とに角新羅の圧迫は強くて新羅と百済の間にある伽耶とか加羅は殆ど新羅の支配下に入ってしまう。その巻き返しを図ったのが百済最後の王となる31代目の義慈王です。642年に伽耶や新羅に侵入し、かなりの戦果を上げます。その折に背後を固めるべく日本と連携を強化しました。日本も伽耶・加羅地域（日本では任那と言っていますが）に持っていた権益を新羅に奪われてしまっていたのですから、百済との連携を強めることに躊躇はありません。そしてその国交の人質として、日本に派遣されたのが義慈王の王子豊璋と禅広（善光）です。

660年になって新羅は、半島に勢力を拡大したい唐と結んで百済を攻め、遂に百済を滅亡させます。百済の王室に繋がる鬼室福信らが、日本にいる王子豊璋を担ぎ出し日本の援助を求めて百済復興を図ります。時の天皇は女帝の齋明天皇で、中大兄皇子が摂政の地位にありました。後の天智天皇です。福信らの要請に応じて日本は陸海の大軍を百済に送ります。しかし663年に白村江（ハクスキノエ）の戦いで倭の艦船400艘が唐新羅連合艦隊によって壊滅的な打撃を受け、ここに百済復興計画は終りを遂げます。それと共に、日本の半島における権益は完全に消滅してしまいます。

（2）禅広と百済の亡命者

豊璋と共にわが国に来ていた禅広（善光）は、中大兄皇子の計らいによって664年に摂津国難波に移住し、百済からの多くの亡命者も加わって百済郷を作ります。JRの天王寺駅の近くに百済という貨物駅がありましたがその辺り一帯がそうです。JR環状線の鶴橋から桃谷辺りにかけて半島からの人たちが大勢住んでおられますが、これも関係があることでしょう。百済が滅亡して大勢の支配階級の人たちが日本に亡命して来ました。大和や河内のほか近江や信濃や関東各地などにも分散して定着しました。滋賀県の蒲生郡に石塔寺というお寺がありますが、そこには百済式の石の塔がありますし、近くには鬼室神社があつて、百済復興に活躍した鬼室福信を思い起こさせます。この辺りに多くの百済の人たちが住み着いた証拠です。長野の善光寺も、お寺の縁起には書かれていませんが、私は、この王子禅広（善光）から来ているのではないかと密かに考えております。

禅広は690年には持統天皇から「百済王（くだらのこにきし）」の姓を受けました。従って百済王というのは百済の王様という意味ではなく、日本の貴族としての姓を天皇から受けたということになります。百済の王家が日本の天皇に臣従したことになると言えるかも知れません。

（3）百済王敬福の活躍

禅広の曾孫に敬福という人がおります。743年（天平18年）に陸奥守に任じられます。この年は聖武天皇が大仏建立の詔を発せられた年に当たります。大仏鑄造の作業は順調に進みますが、仕上げに使う金が不足して天皇が悩んでおられた749年の4月に、敬福は任地の陸奥国で産出した金900両を献上しました。900両は今で言えば約13～14キロくらいの目方で、大仏を仕上げるにはとても足りない量ではありましたが、取り敢えずの目途がついたことで天皇は大喜び、百済王敬福の功績を讃えて従三位宮内卿河内守に昇任させられました。そして河内守の任地として交野郡を与えられたのです。

因みに金の産出を慶んだ大伴家持の歌が万葉集にあります。次のような歌です。

「すめろぎの 御世さかえんと 東なる みちのく山に 黄金花咲く」

ところで敬福の与えられた交野郡がまさにこの場所、ここ中宮の地です。ここは百済王がやってくる前から郡のお役所か何かの街として開発されていたのではないかと考えられていますが、百済王一族や関係者が大勢やってきて街を新しく整備し作り上げたことには間違いありません。そして百済王家の氏寺として建てられたのが百済寺でした。敬福の時代よりは少し下がって、奈良時代の末の頃780年頃に建てられたようですが、平安時代には消失してしまいます。その跡がこうして

国指定の特別史跡として整備保存されているわけでありませぬ。

3. 桓武天皇の即位と遷都

(1) 聖武天皇から桓武天皇へ

聖武天皇は大仏完成の目途がついたことに安心されたのか天皇を退いて娘の阿倍皇女に譲位されます。孝謙天皇です。孝謙天皇は、一時天武天皇の孫で舎人親王の子である大炊王に譲位されて淳仁天皇が誕生しますが、淳仁天皇の後ろ盾であった藤原仲麻呂が騒動を起こして敗走し、天皇もまた捕らえられて淡路島に廃流されてしまい、女帝が再び天皇になりました。称徳天皇であります。

女帝は結婚されませんから子どもがありません。弓削道鏡を後継の天皇に立てようとして大騒動を起こしたことはご存知のところでしょう。天皇は失意のうちに770年53歳で崩御されました。その後に藤原氏によって擁立されたのが白壁王で、光仁天皇です。天智天皇の皇子施基皇子を父としますが、皇位継承の立場からは離れていたのだから、ご本人は天皇になるなんて夢にも思っておられなかったでしょう。そして60歳を過ぎてから天皇に担がれたのですから、これを見ても当時の複雑な政治情勢が推測できます。

高齢の光仁天皇が11年後に皇太子の山部皇子に譲位され、桓武天皇が誕生します。781年のことですが、光仁天皇はその後間もなく崩御されています。山部皇子は光仁天皇と百済系の女性高野新笠の間に生まれております。この高野新笠は、百済25代の王武寧王の子孫である倭乙継の娘ですから素性のはっきりとした方なのですが、こうして桓武天皇には百済の血が半分入っていることとなります。こんな関係があつて、桓武天皇は百済に対してたいへん親近感を持っておられ、790年には「百済王等は朕が外戚である」と詔を出しておられます。そして百済王家との深い交わりが続くこととなります。

(2) 長岡京遷都

桓武天皇は即位して3年後、710年以来約70年間続いた平安京を後にして山城国乙訓郡長岡に遷都されます。遷都の理由としてはいろいろと挙げる事が出来ますが、東大寺をはじめ仏教の僧侶たちが権勢を強めて政治に大きく関与をするようになっており、その状態から脱出しようというのが最大の理由ではないでしょうか。即ち政治問題が第1の理由としてあげられます。それに、70年を経た平安京の衛生問題もあります。人が多く住み着き出入りする都には、排泄物やゴミ処理といった衛生問題が付きものです。大仏建立に際して鍍金に使った水銀の垂れ流し公害も考えられます。皇位継承問題として起こった782年の氷上川継の変、即ち聖武天皇の血を引く皇族の謀反事件ですが、これもまた大きな要因と考えられます。むしろこの事件が最大の原因ではないかとの説も有力です。

784年延暦3年は甲子の年で、干支から見てこの年に世の中の全てが改まると言われます。光仁天皇誕生によって皇統が天武系から天智系へ移りました。桓武の心にもその意識が強かったかもしれませぬ。光仁天皇によって皇統が変わったことを、遷都によって形に表したと言えるのかも知れませぬ。このことは桓武天皇が長岡京の南に当たる枚方の樟葉か何処かの地に祭壇をつくり、父光仁を天帝として祀ったことから見ても考えられることです。

4. 百済王明信

(1) 交野行幸

桓武天皇がまだ山部皇子であったとき、771年のことですが、光仁天皇にお供して交野を初めて訪問しておられます。百済王敬福は766年に死去していますから、その子理伯の時代です。天

皇をお迎えする宴も当然行われたでしょう。理伯の娘に明信という人がいます。敬福から見れば孫娘ということになります。後に藤原継縄（つぐただ）の夫人となり桓武天皇の尚侍（ないしのかみ）となった人ですが、恐らく皇子はこの時に明信にお会いになったでしょう。皇子の接待役をこの明信が担っていたことは容易に想像されることです。娘を天皇や皇太子に近づけて権勢に与ろうとするのは貴族階級として当然の行動ですから。山部皇子はこの時明信に対して強い印象を持たれたのではないのでしょうか。天皇となってからの二人の関係を見れば、そのように推測するのも無理ではないと思います。

桓武天皇の交野行幸は恐らく交野が原での狩猟が目的だったでしょう。狩猟目的の行幸を「野行幸」と言いますが、当時狩猟は貴族たちの軍事訓練が主目的でありまして、また半分は薬用となる鹿の角などを取るのが目的です。勿論ゲーム（遊び）感覚も十分含まれていたと思います。桓武天皇は交野だけでなく嵯峨野だとかあちこちで狩猟をおこなっておられますが、交野行幸は783年から始まって、785、787、791、792、794、795、799、800、802年と合計10回に及んでいます。お気に入りの場所だったことが想像されるのです。

（2）桓武と明信

桓武天皇は天皇として783年に初めて交野に行幸されています。明信は既に藤原継縄夫人となっていた筈ですが、恐らくこの時も天皇接待の主役を務めたでしょう。何故ならこの時からすぐに明信は従四位尚典（ないしのすけ）に任じられているのです。尚侍が内侍司（ないしのつかさ）今で言うなら宮内庁の長官で、尚典は次官です。即ち天皇の身の回りをお世話する役所の次官に就任したわけです。接待役への功労賞でしょうが、愛する人への贈り物かも知れません。

当時の天皇には皇后のほか後、夫人（ぶにん）、嬪（ひん）などとたくさんの奥方がおられますが、いつも天皇と一緒に暮らしているわけではありません。むしろ尚侍や尚典のほうがいつもお側に仕えているのです。その尚典に明信が選ばれたということは意味がありそうです。

787年には天皇は藤原継縄の屋敷に立ち寄り、そこを行宮とされました。そして明信はこの時から従二位尚侍に昇進します。この継縄の屋敷がどこにあったのか、南樟葉に継縄屋敷（けいじょうやしき）という小字があるので、そこにあったのではないかと「郷土枚方の歴史」は推測していますが、昔の貴族はいろいろなところに屋敷を持っていましたから、百済王神社にある「桓武天皇行宮跡」という石碑が間違いであると断定することも出来ません。

平安遷都が794年に行われますが、その翌年の4月に桓武天皇は宮中で曲水の宴を催し、その席で古歌を歌って明信に呼び掛け返歌を求められました。

「いにしへの 野中古る道 改めば 改まらんや 野中古る道」

明信は今や人妻の身、夫の継縄もいる貴族たちの前で返す言葉も無く呆然としていると、桓武天皇がその心を察してか自ら返歌を歌われました。

「君こそは 忘れたらめ にぎたまの たわやめ我は 常の白玉」

その意味は、あなたはもうお忘れになったでしょうけれど、わたしの心は若かったあの頃と少しも変わっていません、ということです。この歌を聞いて席に居並ぶ人々はどっと歓声をあげ拍手をしたと「続日本紀」が伝えています。要するに桓武と明信の仲は宮廷において公然のものとなっていたのです。

（3）百済王の栄達と衰微

百済王家が天皇の外戚であることからか明信の存在ゆえか、いずれにしても桓武天皇の時代からその子嵯峨天皇、孫の仁明天皇の時代に掛けて百済王家の女性たちの多くが女御、更衣などとして天皇の後宮に入りました。

資料に名前を挙げておきました。光源氏のような名前の源光の母である豊俊の娘というのは、恐

らく宝持という名であろうとされています。

また男性たちは多く出羽守や陸奥鎮守副将軍などとして東北警護の役割を担っています。これは、半島において百済が滅亡したあと新羅が高句麗をも滅ぼしますが、その高句麗の残党が鴨緑江の北のほうで渤海という国を建設し、わが国に国交を求めてきます。聖武天皇の時代です。それに伴って陸奥国で蝦夷の活動も活発になり、その対策が極めて重要になります。

敬福自体が陸奥守になったのもこの渤海対策と考えられるのですが、先程お話しさせて頂いた河内守になった後にも、出雲守、南海節度使などの役職に就きまして、裏日本の警備に当たっています。渤海は出羽だけでなく、日本海側のあちこちに漂着したようです。有名な坂上田村麻呂も半島系の人ですが、百済王家の有する軍事力は当時の日本にとって不可欠の強い力であったと考えられます。相手が高句麗系の渤海であり、同じ人種につながる百済王の力量が利用されたものと考えられます。

資料に名前を挙げておきました。

平安時代に絶大な勢力を誇った藤原氏ですが、藤原氏には4家がありまして、南家、北家、式家、京家の4つであります。藤原鎌足の子、不比等が持統天皇の時に頭角を現し、権勢を欲しいままにするのですが、日本書紀なども実質的にはこの不比等が関与して作られたのだ、だから藤原氏に都合の良いように作られた歴史書だとも言われているのです。その不比等の4人の子の家系をこのように南、北、式、京と呼んでいます。その中の北家が平安時代になって天皇家との結びつきを強めて勢力を伸ばします。

明信の夫継縄は南家でありまして、明信との間に生まれた子の乙叡（たかとし）は中納言になっていました時、南家出身の吉子が生んだ伊予親王の反逆事件に連座して追放され、南家は急速に没落します。北家の陰謀と言われていますが、百済王家もこの南家の失墜と共に衰退してしまいます。そして明信の弟である俊哲の孫豊俊のときに、三松姓となって百済王姓は消滅してしまいます。百済が滅亡して時間が経ち、もう百済王を名乗らなければならない理由も雰囲気も消え失せていたでしょうが、天皇家以上に権勢を誇った藤原北家の前に百済王家は急速に凋落したのです。

百済寺跡にまつわる百済王と桓武天皇について、時間が限られていますので駆け足でお話しをさせて頂きました。また、お配りしました資料とは少し話の運びに違った点がありましたこととお詫び申し上げます。少しは古代についてのイメージを持って頂くことが出来たでしょうか。

どうぞ今後とも国指定特別史跡である「百済寺跡」に関心を持ち続けて頂きますよう、心からお願い致しまして終わらせて頂きます。ありがとうございました。